なほ**行き行き**（四段・用）て、武蔵（むさし）の国と下つ総（しもふさ）の国との中に
いと大きなる河**あり**（ラ変・終）。それをすみだ河と**いふ**（四段・終）。
（形動・ナリ・体）
その河のほとりに**群れぬ**（上一・用）て、**思ひやれ**（四段・已）ば、限りなく
（形容・ク活用・用）
遠くも**来**（カ変・用）にける（過去「けり」体）かな（←終助・詠嘆）と**わび合へ**（存続「り」体）るに、渡守、
（形容・ク・用）（→完了「ぬ」用）（四段・已）
「はや船に**乗れ**（四段・命）。日も**暮れ**（強意「ぬ」終）ぬ（四段・体）。」と**言ふ**（下二・用）に、
乗り（四段・用）て**渡ら**（意思「む」終）むと**する**（四段・未）に、みな人ものわびしくて、
（サ変・体）（形容・ク・用）
京に**思ふ**（四段・体）人なきにしも（断定「なり」用）**あら**（ラ変・未）ず。
（形容・ク・体）（副助・強調）（打消「ず」終）
さる折しも（副助・強調）、白き鳥（形容・ク・体）の嘴（はし）と脚と赤き、鴫（しぎ）の大きさ
（格助・同格）（形容・ク・体）
なる（断定「なり」体）、水の上に**遊び**（四段・用）つつ、魚（いを）を**食ふ**（四段・終）。
京には**見え**（打消「ず」体）ぬ鳥（断定「なり」已）なれば、みな人**見知ら**（四段・未）ず。（打消「ず」終）
（下二「見ゆ」・未）
渡守に**問ひ**（四段・用）ければ、「これなむ（係助）都鳥。」と**いふ**（四段・体）を**聞き**（四段・用）て、
名にし**負は**（四段・未）ば　いざ**こと問は**（四段・未）む（意思「む」終）　都鳥
わが**思ふ**（四段・体）人は　**あり**（ラ変・終）や（係助）なし（形容・ク・終）や（係助）と
と**よめ**（完了「り」用）りければ、舟**こぞり**（過去「けり」已）て**泣き**（完了「ぬ」用）にけり（過去「けり」終）。
（四段・已）（四段・用）（四段・用）

なおも進んでいき、武蔵の国と下総の国との間に
たいへん大きな川がある。それを隅田川という。
その川のほとりに集まって座り、（旅のことを）振
り返ってみると、たいへん遠くまで来たものだなあ
と嘆き合っていると、渡し守が
「早く船に乗れ。日も暮れてしまう。」と言うので、
乗って渡ろうとするけれども、みんななんとなく
悲しくて、
（それは）都に恋しく思う人がいないわけではない
（からだった）。
ちょうどその時、白い鳥でくちばしと脚が赤くて
鴫の大きさの鳥が、
水の上で遊びながら、魚を食べている。
都では見かけない鳥だったので、みんな名前を知ら
ない。
渡し守に聞いてみると、「これは都鳥だ。」と言うの
を聞いて、
その身に都という名前を持っているのであれば、
さあ尋ねましょう、都鳥よ。私の恋しい人は元気
でいるのかどうかと。
と詠んだので、船に乗る人達はみんな泣いてしまっ
た。

©高校古文No.1授業ノート　https://kobun.info/